

誰に孫がいて、誰が孫育てをしているのか

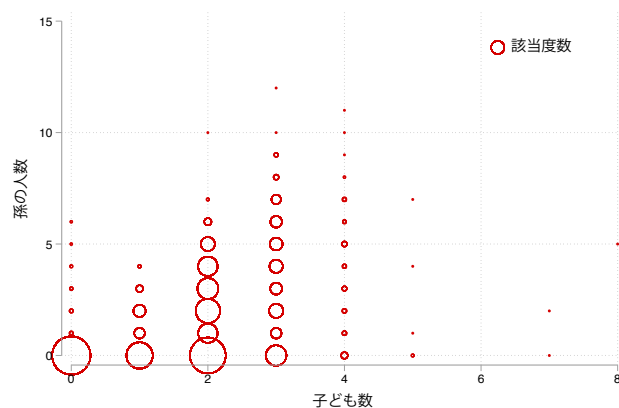
「中高年期の家族生活についての全国調査 (NFRJ-S23)」の結果から

○筒井淳也 (立命館大学)、菊澤佐江子 (法政大学)、安元佐織 (大阪大学)、李ウエンウエン (立教大学)

長寿化、少産化、未婚化といった人口学的変化のなかで、家族関係や家族経験は大きく変化しており、また多様化している。同時に、「祖父母であること」の経験も、かつてのあり方とは変わっている(安藤 2017)。概して長寿化と少産化は、数少ない子どもあるいは孫と、長期における関係を持つ経験を増やし、他方で未婚化・少産化は、そもそも子どもあるいは孫がいない人も割合を増やしているはずである。

以上のような人口学的変化、あるいはライフコースの多様化は、「孫を持つ」「孫と関わる」という経験とどうかかわるのだろうか。未婚割合には性差の他、学歴による差がみられるが、このことは孫経験にも関係があるのだろうか。離死別経験の影響はあるのだろうか。こういった問いに答えるには、ある程度詳細な情報を含む調査データが必要になる。

本研究では、「中高年期の家族生活についての全国調査(NFRJ-S23)」(全国 50～79 歳、住基台帳からの層化二段無作為抽出)のデータを用いて、上記の問いに取り組む。分析の結果からは、高齢者(65 歳～79 歳、ただし第三子まで)に限っても、孫の人数の分布で最も多いのは「孫がいない」であった。初孫を持った年齢は、半分以上は 50 代だが、60 代も 3 割ほどいた。また、孫がいるかどうかと、本人の離死別経験のあいだには統計学的に有意な関連がなかった。



図：子ども数と孫人数のバブルチャート（ただし孫の数は第三子までの子の孫）

また、孫の世話の頻度についてランダム効果トービットモデルを推定したところ、本人の性別が女性の方が頻度が多く、その他としては一番下の孫の年齢が低いと高頻度、居住地が近いと高頻度といった傾向が見られたが、それぞれの子（孫の親）の性別は、その子の子（孫）の世話頻度とは統計学的に有意な関連がみられなかった。つまり、男性の子の孫と女性の子の孫の方との世話頻度には差がみられなかった。顕著な差があるのは、それぞれの子の配偶状態で、子が離別の場合にはその子の子（孫）の世話頻度がかなり高い。これらの結果は、佐々木他(2017)の結果と一部重なるものであった。

少子高齢化と共働き化という流れにおいて、祖父母世代の「孫育て」に注目が集まるなか、そもそも孫がいない層を視野に入れたライフコースの多様化のあり方について、よりバランスのとれた記述が必要になる。

キーワード：人口学的特性、孫人数、孫との関わり